令和６年度　大学生の力を活用した集落復興支援事業

実態調査報告書

会津大学短期大学部プロダクトデザインゼミ
×
福島県いわき市遠野町地域づくり振興協議会

公立大学法人　会津大学短期大学部　産業情報学科

2025 年（令和 7）年 2 月

目次

1．はじめに

2．いわき市遠野町の概要

3．遠野和紙の取り組み

4．いわき市遠野町の実地調査
9/24　遠野和紙灯りづくりワークショップ
9/26　和紙製作工程の学習と意見交換会の実施（実地調査）
10/5　遠野和紙灯り展・アートコンテスト

5．得られた知見より具体的なデザイン提案

6．今後の展望

7．おわりに

1. はじめに

私会津短期大学プロダクトデザインゼミは、1 年生 5 名、2 年生 4 名で構成され、デザインを通じた地域活性化を目的として活動している。具体的には、令和元年度より、会津若松市大戸地区における竹材の荒廃問題に着目し、地域と連携しながら対策に取り組んでいる。また、地域の要望に応える形で、こども園の依頼を受け、子育て支援スペースで使用する木製玩具のデザインおよび制作を実施した。

令和 5 年度、いわき市元遠野支所の若松直哉氏より、遠野和紙を用いたあかり制作に関する相談を受けた。3 月中旬には、遠野和紙・楮保存会を訪問し、関係者から和紙の活用に関する課題をヒアリングした。その結果、デザインの視点から新たな和紙の活用方法を模索し、遠野町の地域活性化に寄与することを目的として本事業を開始した。

本活動を通じて、地域資源の有効活用および持続可能なデザインの実践を進めていく。

2. いわき市遠野町の概要

いわき市遠野町は、市の南西部に位置し、阿武隈高地南部の東斜面に広がっている（下図の赤い点で示す)。北は三和町、東は常磐藤原町、南は勿来町山田地区、西は田人町石住地区に囲まれている。標高は 80m～200m で、平坦地は少なく、大部分が山林で占められている。町の気候は地域によって異なり、南部の上遠野地区は海岸低地とほぼ同じ気候であるのに対し、北部の入遠野地区は高原性の気候を呈している。豊かな自然環境に恵まれ、周囲には山間の緑地が広がり、鮫川や入遠野川などの清流が流れている。また、アユ・イワナ・ヤマメの渓流釣りが楽しめるほか、ゲンジボタルやカジカガエルなどの生息地としても知られている。

遠野町の位置

3. 遠野和紙の取り組み

遠野町地域づくり振興協議会では、地元の伝統産業である「遠野和紙」の継承に取り組んでいる。遠野和紙は約 400 年の歴史を持つが、洋紙の普及に伴い職人の数が減少し、2010 年には最後の職人が廃業した。その後、2022 年に住民有志による遠野和紙・楮保存会が設立され、伝統の継承に向けた活動が続けられているものの、スタッフの高齢化が大きな課題となっている。保存会の取り組みは、地域の誇りを次世代へと受け継ぐ目的として活動している。協議会では重点事業として継続的に支援してきたが、担い手の減少が進み、持続可能な継承に向けた新たな対策が求められている。

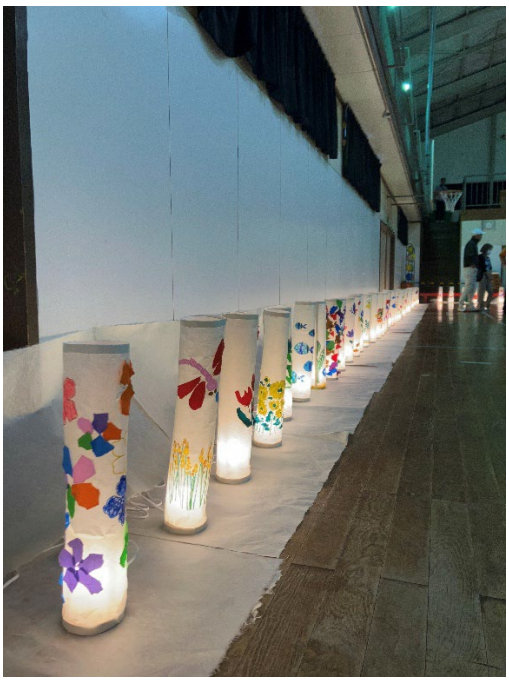
4. いわき市遠野町の実地調査の活動スケジュール

2024 年度に実施した活動は以下のとおりである。

①遠野和紙灯りづくりワークショップの実施

9 月 24 日、遠野和紙保存会の依頼を受け、遠野小学校の 5・6 年生児童を対象とした「遠野和紙あかりづくりワークショップ」を実施した。本ワークショップの実施にあたり、遠野和紙保存会とオンラインで複数回の打ち合わせを重ね、内容を検討した。最終的に、子どもたちは遠野和紙に鉛筆で下絵を描き、色紙を使ったちぎり絵で装飾を施し、あかりを制作することとした。完成した作品は、10 月に開催された遠野和紙灯り展に展示された。

ワークショップの様子



児童たちが作った作品

②和紙製作工程に関する座学・実技講習、保存会の方々との意見交換会（実地調査）

9 月 26 日、遠野和紙製作の工房である**「学舎」にて、遠野和紙保存会の方々から和紙製作の工程に関する講習**を受け、知識を深めた。また、実際に紙漉きを体験し、伝統技術の難しさと手作業の大変さを実感した。

午後には上遠野公民館にて、遠野和紙保存会の方々と雑談会を実施し、和紙の活用法に関する課題や今後の展望について意見交換を行った。

紙漉き体験中の様子

保存会の方々との意見交換会

③遠野和紙灯り展・コンテストの参加

10 月 6 日、遠野和紙保存会主催の「遠野和紙あかり展」が遠野小学校体育館にて開催された。本展には、いわき市内の参加者に加え、埼玉県・東京都・徳島県からも出展があり、多様な作品が展示された。また、「遠野小学校 5・6 年生によるワークショップ作品」「遠野和紙あかり展実行委員会制作のあかり作品」「入遠野絵手紙教室によるあかり作品」にも展示された。

会津大学短期大学部からはデザインを学ぶ学生が制作した 14 作品を出展した。

出展した作品

展示会場の様子

4. 活動により得られた知見

以上の活動を通じて、遠野和紙の知名度が高くなく、活用の幅も限られていることが明らかとなった。また、和紙作りの過程で楮の芯が大量に廃棄されていることも課題として浮かび上がった。一方で、遠野和紙保存会のメンバーはワークショップを実施するノウハウを持っており、教育的な取り組みを展開できる可能性があることが分かった。

これらの知見を踏まえ、今後は遠野和紙の知名度向上に向けた取り組みを強化し、より多くの人にその魅力を伝えていくことが求められる。また、和紙や楮の新たな活用方法を提案し、資源の有効活用を進めることが重要である。さらに、保存会の持つノウハウを活かし、和紙や楮を用いたワークショップの企画・実施を検討し、地域内外への普及を目指していく。これらの取り組みを通じて、遠野和紙の持続的な継承と地域活性化につなげていきたい。

廃棄されている楮の芯

5. 得られた知見より具体的なデザイン提案

①和紙雑貨ブランドの提案

遠野和紙の知名度向上を目的とし、和紙雑貨ブランドの立ち上げを提案する。ブランド名は「紙日和」とし、日本の伝統的な和紙の美しさと現代のライフスタイルをつなぐブランドとして展開する。

「紙日和」は、和紙が主役となる日常をイメージし、親しみやすく、雑貨全般にマッチすることを考慮してネーミングした。古来の工法と原料を用いた遠野和紙の質感や繊細さを活かし、温かみや耐久性を備えた製品を通じて、現代の生活に和紙を取り入れる。使うたびに心に安らぎをもたらすようなアイテムを提供し、遠野和紙の魅力を広く発信していくことを目指す。

紙日和

-Kami biyori-

手触りが伝える自然と伝統の美

ブランドのロゴタイプ

②「紙日和」の製品提案

遠野和紙の魅力を広く発信し、持続的な活用を促進するため、新たな活用方法を考案した。デザインコンセプトは、「保存会のスタッフでも自作できるように」「ワークショップキットとして展開できるように」という視点を重視した。

このコンセプトに基づき、和紙を用いた８種類の作品を提案する。具体的には、ポーチや缶バッジ、卓上モビール、フォトフレーム、目印アクセサリーなど、多様な雑貨アイテムを考案した。これらの製品は、遠野和紙の質感や風合いを活かしながら、実用性を兼ね備えたものとなっている。ワークショップの素材としても活用できるため、地域内外の参加者に和紙の魅力を体験してもらう機会を創出し、遠野和紙の認知度向上につなげていくことを目指す。

「紙日和」の製品提案

「紙日和」の製品提案つづき

③楮の芯を活用した製品提案

和紙製作の過程で大量に廃棄される楮の芯に着目し、新たな活用方法を提案する。前述の「保存会のスタッフでも自作できるように」「ワークショップキットとして展開できるように」というデザインコンセプトを基に、楮を使った 3 種類の作品を考案した。具体的には、車やロボット型のおもちゃ、ライトを製作した。楮の芯の軽さや独特の風合いを活かし、シンプルな構造ながらも温かみのあるデザインに仕上げた。これらの製品は、楮の新たな価値を見出し、廃棄物の削減にも貢献する取り組みとなる。

楮の芯を活用した製品提案

遠野町での提案実施と保存会の反応

11 月 30 日、考案した和紙雑貨ブランド「紙日和」や和紙・楮の新たな活用方法について、再び遠野町を訪問し、保存会の方々に提案を行った。提案に対して、「ブランドという発想がなかった」「保存会でも作ってみたい」「イベントで販売してみたい」といった前向きな意見が寄せられ、好評を得た。特に、保存会の方々自身が製作に関わることへの関心が高く、今後の具体的な展開につながる可能性が感じられた。今回の提案を通じて、遠野和紙の活用の幅を広げる新たな視点を共有できたことは、今後の活動にとって大きな意義を持つと考えられる。

遠野町での提案実施中の様子

6. 今後の展望

来年度以降は、保存会の方々と協力し、今回提案した作品の制作を進めていく予定である。具体的には、遠野地区周辺のイベントでの商品販売を通じて、遠野和紙や楮製品の魅力を広く発信するとともに、子ども向けのワークショップの開催も検討している。

ワークショップでは、地域の子どもたちや訪問者が実際に和紙や楮に触れ、ものづくりを体験できる機会を提供したい。また、保存会のノウハウを活かし、地域住民との交流を深める場としても機能させたいと考えている。これにより、遠野和紙の持続的な継承と地域の活性化に寄与することを目指していく。

7. おわりに

本活動を通じて、遠野和紙の魅力や可能性を改めて実感するとともに、その継承には新たな活用方法の提案や、より多くの人々に和紙の価値を伝える取り組みが必要であることを再認識した。特に、保存会の方々との対話を重ねる中で、伝統を守るだけでなく、それを現代の暮らしに取り入れる工夫が求められていることを強く感じた。

今回提案した和紙雑貨ブランド「紙日和」や、ワークショップを通じた和紙・楮の活用は、遠野和紙の新たな可能性を広げる一歩となる。保存会の方々からも前向きな反応をいただき、今後の展開に向けた手応えを感じている。

来年度以降は、実際に作品の制作やイベントでの販売、ワークショップの開催を行い、地域の方々とともに遠野和紙の魅力を発信し続けていきたい。本活動が、遠野和紙の継承と地域活性化の一助となることを願いながら、今後も取り組みを継続していく所存である。

2024 年度会津大学短期大学部産業情報学科デザイン情報コースプロダクトデザインゼミ
栗城美胡琴、石田華暖、佐藤大晟、本田涼七、阿部愛音、猪狩那斗、石澤心愛,
鈴木健太、今野真佳

２年代表　栗城美胡琴
指導教員　　沈得正